

なゆたん通信

燐

第二作配信開始記念

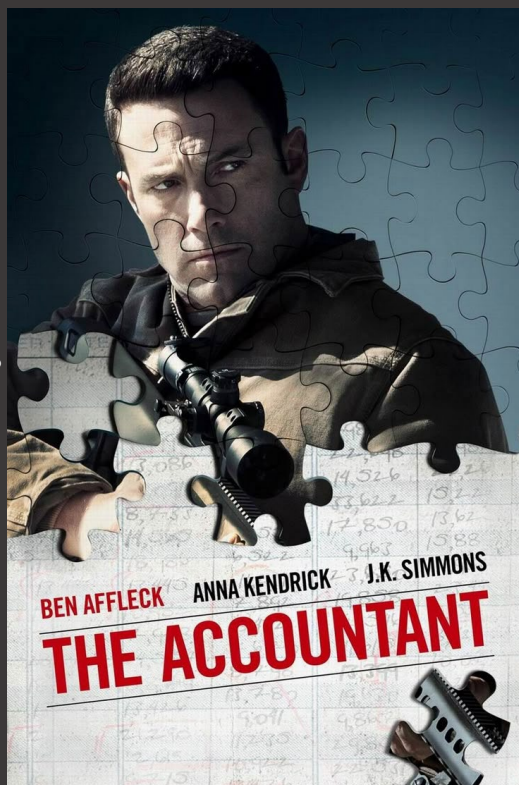
第64号 令和7年6月18日発行

自らの「頭脳の囚人」は社会の中に居場所を見つけられるのか 映画『ザ・コンサルタント』評 (原題: The Accountant)

【あらすじ】

1989年、アメリカの神経学研究所にとある男の子クリスチャン・ウルフが家族と共に訪れる。母親はクリスチャンがその特性により弟以外に友達がおらず、生きづらさを抱えていることを嘆くように相談していた。研究所の学者は「人生を過ごすための技術」を身につけるために研究所の穏やかな空間でしばらく過ごしてみることを提案するものの、軍人である父親はそれに反対。「世の中で生き抜くためには厳しい環境の中で鍛える必要がある」という考えからクリスチャンを連れて研究所を後にした。

時は流れ現代、かつての男の子クリスチャン・ウルフは屈強な青年に成長し、アメリカの田舎町で会計士として働いていた。ある日、そんな彼に大企業が財務調査を依頼する。人付き合いは苦手ながらも、数字にとてつもなく強い彼は、企業の重大な不正を発見するもなぜか調査を打ち切られてしまう。そしてその日から何者かに命を狙われるようになった彼には、実はもう一つの顔があった…。



クリスの普段の食事(再現)
パンケーキがやや焦げている様子も再現しようとしたのですが、本編ではここまで焦げていませんでした。

【これまでに見たことのないヒーロー像】

今作のポスターや予告編では「しがない会計士を営む男の壮絶な裏の顔」という触れ込みで紹介がされています。大企業の影で不正を働く悪の勢力を“ただの男”がとてつもない技術で成敗していく…というものが大雑把な流れになりますが、本編の最大のテーマは「自閉症という特性を持つ人の葛藤」にあります。

主人公のクリスチャン・ウルフはいわゆる「高機能自閉症」という特性をもった人物として描かれており、他人とのコミュニケーションのぎこちなさ・そっけなさや、完璧なまでにコントロールされた日常生活の“決まり事”をこなす様子からもそれがうかがえます。

こうした特性を持つ人々の「変わったところ」をしっかりと描きつつも、ただ“おかしなヤツ”として扱う訳ではなく、この世界に確かに存在しており、そしてそうした特性を抱えながらも社会に適応するために必死にもがいている様が描かれています。

特異な人物の面白い・興味深い姿と、社会をなんとか生き抜こうともがく切実な姿との塩梅が絶妙な作品となっています。

(次のページに続く)

「なゆたん通信」
バックナンバーはこちら
<http://yutaka-wel.com/?cat=36>



なゆたん通信 燐

第64号 令和7年6月18日発行

【作中で繰り広げられる会話の一例】

財務調査の依頼を受けたクリスが相手企業の経理部員デイナと自己紹介を終えた後の会話

デイナ: I thought we could have launch.

(よかったらランチを一緒に)

クリス: I brought on my launch.

(自分で持ってきた。)

デイナ: No, I... I... bring on my launch too.

(私も持ってきてるの)

I can answer the questions you have...

(調査に関する質問があれば何なりと...)

クリス: I have no questions.

(質問はない。)

デイナ: Yeah...OK...yeah...

(ああ...はい...)

You wanna make an assessment...

(ご自身で検証したいですね)

クリス: YES, THANK YOU.

(どうも)

【父親は息子の特性にどう向き合ったか】

今作で大きな存在となっている人物の一人に、主人公の父親がいます。その特性から外界からの刺激に対してパニックになることも多かったクリスに対して、父親は苦手なものから逃げることを許さず、決して甘やかさないという非常に厳しい(注意:もちろんなゆたの方針ともかなり異なります！)考え方で接していきます。結果的にクリスは就職をし一人で生活できているものの、生活の端々で当時の異常なまでに過酷な訓練の日々がフラッシュバックしています。

しかし、クリスにとっても(共に育った弟にとっても)父親はかけがえない存在であることもまた事実。複雑な家族関係の果てにクリスが取る行動にも注目です。

【制作陣の意図】

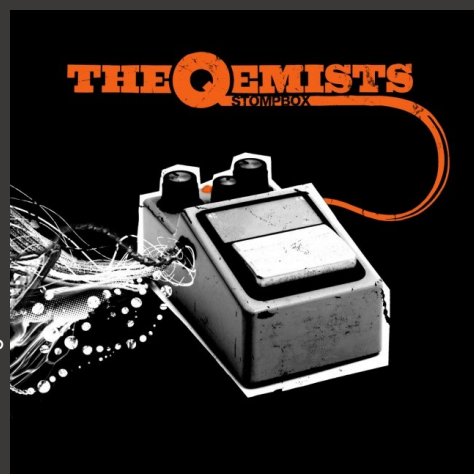
監督のギャビン・オコナーと主演のベン・アフレックは主人公クリスチャンのキャラクターを創造するにあたり自閉症患者35人と面会を行い人物造形を行いました。ひとえに「自閉症」といっても個人によって特性は様々に異なることを理解してから制作に臨んだということがインタビューで語られています。

また監督は「人と違うことを評価できる時代だ。(中略)異質な人々を祝福する映画を作りたかった」と本作の意義について説明しています。

【まとめ】

今作に視聴年齢の制限はないものの裏社会の勢力との抗争がストーリーに関わることもあり非常に血の気の多い作品となっています。ですが、観終えたあとには不思議な心地良さと優しい気持ちが残るこれまでになく面白い一作となっています。

この作品は本国アメリカで2016年に制作された作品であり、2024年には第二作も公開されていたのですが、6月5日より日本でもAmazon Prime Videoで配信が開始されました。気になった方は是非ご覧ください。



The Qemists
Stombox(2007)
現代での“訓練中”に流れている楽曲



Jackson Pollock
Free Form(1946)
今作のある重要な場面で
登場する絵画